

chapter1

行かないんじゃない、
行けないんだ！



学校に行けなくなったとき、子どもたちは何を思い、どんなことを考えて、毎日を過ごしているのでしょうか。当初の混乱と不安の中で、その胸のうちを言葉にできる子はほとんどいません。

なぜ行けないかなんて自分でもわからない、お母さんに心配をかけたくない、つらい出来事を思い出したくない……。さまざまな事情から子どもたちは口を閉ざします。

この章では、そんな子どもたちの心と体の状態を読み解くひとつの手がかりとして、不登校を経験した〈先輩たち〉の言葉を紹介します。当然のことですが、傷つき、悩み、言いようのない不安におそわれているのは子どもだけではありません。「わが子に聞いても答えが返ってこない」という状況の中で、これらの言葉が、ほんの少しでも親御さん自身を支える一助になればと願っています。

【chapter1】に登場するカウンセラー（五十音順）

岩佐 壽夫（家庭ケースワーク研究所所長）

海野 千細（八王子市教育委員会学校教育部教育指導課心理相談員）

大木 みわ（植草学園大学名誉教授）

小栗 貴弘（跡見学園女子大学心理学部准教授）

木津 秀美（元富士見市教育相談室教育相談専門員）

小林 正幸（東京学芸大学名誉教授）

*詳しいプロフィールは197ページをご覧ください。



朝になるのが怖かった。
なんととしても行きたくなかったので、
毎朝、トイレに閉じこもったり、
家のどこかに隠れたり、プチ家出をしたりした。

小学2年から高校1年まで不登校状態が続いた女の子。
小2のころは純粹に行きたくなかったので、なぜ行かないと
いけないだろうという気持ちが強かった。一方で、学校に
行くという「普通」のことができない自分はダメな人間なん
だと思うようになっていったという。

「小4のころ、今日も母親から行かないことで怒られると
思って、家族が寝ているうちに財布や折りたたみ傘などを
カバンに入れ、ふらっと家出をしたりしました。行くあても
ないので、結局、祖父母のところに行くしかないんですが」



入ってしまったえばラクだから、

と親に言われて中学受験を頑張った。

入ってみるとぜんぜんラクじゃなかった。

友だちもいないし、勉強にもついていけない。

中学1年の2学期から学校に行けなくなった男の子。

「頑張って私立中に入學して、やっとのんびりできると思っ
たら、そこでもまた競争競争。みんな塾に通ってガリガリや
つていて、息ができない感じだった。だんだん親の言うこと
が疑わしくなった。親が疑わしくなると、誰も信じられなく
なり、自分の部屋にひきこもるようになった」



「学校は行くものだ」という意識が強くて、サボるなんてありえないと思っていた。だから、行かなきゃいけない、でも行けないという状態にもものすごく葛藤があった。

私立の女子中高一貫校に入学後、クラスメートから陰湿ないやがらせを受け、中学2年の3学期ごろからしだいに学校に行けなくなつた。夜10時から好きなテレビドラマを見て、それが終わってニュース番組が始まると、「ああ、また明日が始まる…」と絶望感に打ちひしがれていたという。



行かないんじゃない、
行けないんだ。

そんな子どもが

「どうして学校に行かないの？」

と聞かれることは、

本当につらいことなんです。

中学1年の5月の連休明けから、約2年間学校に行けなかった男の子。当初は毎朝、腹痛と吐き気におそわれ、脂汗を流しながら床をころげまわっていた。

「それでも学校に行こうと思うとトイレにかけこんで吐いたりという日が続いて、結局、入学してから1カ月くらいでまったく学校に行けなくなってしまいました」

カウンセラーから
ちょっとひと言

子どもの気持ちに耳をかたむけることから

わが子が不登校になったとき、多くのお母さんお父さんは、「どうして行けないのか」「学校で何かあったのか」「誰かにいじめられたのか」と、その理由を求めて思い悩みます。

でも、「なぜ行かないの?」と聞いて、子どもの口から出てくる理由のほとんどは、不登校のきつかけにすぎません。つまり、ピーンと張っていた糸がその一撃で切れてしまったということ。張りつめていたからこそ、小さなきつかけでプツンと切れてしまう。だから、本質的には、「なぜ、そこまで張りつめてしまったのか」を問題にしなければいけないのですが、それは子ども自身にもわからないんです。そして、なんだかわからないまま学校に行けなくなったり子どもは、たまらなく不安になります。

そのときに親として大切なのは、「行けなくなった原因」を知ろうとすることではなく、「いま、子どもがどんな気持ちでいるか」をわかってあげること。「自分はどうなってしまうんだろう」という子どもの不安な気持ちに、まず耳をかたむけ、手を差し伸べてあげてほしいと思います。大木みわ





持ち物を隠されたり、
座布団にボンドで「死ね」と書かれたり…。
先生に相談すると、みんなの前で、
「お前も、何か恨まれるようなことを
したんじゃないのか」と言われた。

小学5年から学校に行けなくなった女の子。いつもクラス
の中心にいるような活発な子どもだったが、小3で転校し、
早く新しい学校になじんで親を安心させようと頑張ってい
るうち、電池が切れたように、パタッと行けなくなった。

「ただ、それらは不登校の直接的な原因ではなかったよう
に思います。ふりかえると、小1、小2と続けて年の離れた
ふたりの妹が生まれて、ひとりっ子で自分中心だった生活か
ら急にいちばん上の姉になり、すっかりしなくちゃと無理を
するようになったことも関係しているのかな、と」



「いじめはどこの世界にもあることだから
本人が強くなるしかない」
と担任に言われた。
そんな先生のいる学校には
行かせないと決めた。

中学1年のときに、いじめがきっかけとなって学校に行け
なくなった女の子のお母さん。

そのときの学校側の対応があまりにもひどく、いじめら
れた娘だけがどうして「強く」ならなければいけないんだろ
うと、はらわたが煮えくりかえる思いだったという。